慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中学校のダンス授業を支援するための教材開発 : 体育教員のスキルアップを目指して
Sub Title	
Author	市川, 絢子(Ichikawa, Ayako) 秋山, 美紀(Akiyama, Miki)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2013-03
Jtitle	研究会優秀論文
JaLC DOI	
Abstract	本研究では、平成24年に保健体育授業で必修化された「ダンス」授業において、教員の抱える不安や問題を解消し、楽しいダンス授業の実現を支援する方法を提案することを目的としている。先行文献を調査することにより、ダンス必修化に伴い中学校の体育授業の現場が困惑していること、特にダンスに対して知識がない男性教員や男子生徒に向けた授業への不安を抱えている現状があるとわかった。さらに、教員へのアンケート調査により、教材の内容の問題ではなく教材の形態に問題があることが浮かび上がった。これまでにもテキストや講習会などの教材はあったものの、それらが現場の教師の求めている形ではないことが示されたことから、筆者の経験を活かした教材の作成を行うことにした。保健体育授業における目的を満たした上で、教員の抱える不安を軽減するようないつでも見返せる手軽なテキスト教材および動画教材の開発をした。それらを、実際に中学校で体育を指導している3名の教員に使用し評価してもらった。その結果、スマートフォンを利用したいつでも見られる教材の需要があることがわかった。
Notes	秋山美紀研究会2012年度秋学期
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0302-0000-0671

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

SFC-SWP 2012-007

研究会優秀論文

中

学校のダンス授業を支援するための教材開発

～ 体育教員のスキルアップを目指して ～

2012年度　秋学期
AUTUMN

市川 絢子　総合政策学部 4年

秋山 美紀　研究会

慶應義塾大学湘南藤沢学会

Keio SFC Academic Society

推薦のことば

本研究プロジェクトは、保健体育で必修化されたダンスの授業について、先行研究レビューや現場教員のインタビュー調査を踏まえた上で、テキストと動画の教材を開発し、それを評価するという一連の活動を含む。開発した教材は、ステップなどを豊富なイラストでわかりやすく紹介するもので、タブレット端末等で確認しながら、動画も同時に確認できるとういう工夫がされている。単なる現状の問題を調査するにとどまらず、具体的な解決ツールを作成、提案するという、ユニークでSFCらしい卒業プロジェクトである。

筆者の市川は、長年ダンスに取り組んできた自らの経験を、中学校のダンス授業の向上、ダンスの魅力の拡大につなげていこうと、本アクションリサーチを計画した。オリジナル教材の仕上がりの質は非常に高く、研究プロジェクト全体としての完成度が高く優秀であるため、ここに推薦する次第である。

慶應義塾大学
環境情報学部准教授
秋山美紀

中学校のダンス授業を支援するための教材開発

～体育教員のスキルアップを目指して～

慶應義塾大学総合政策学部４年
市川絢子

概要

本研究では、平成２４年に保健体育授業で必修化された「ダンス」授業において、教員の抱える不安や問題を解消し、楽しいダンス授業の実現を支援する方法を提案することを目的としている。先行文献を調査することにより、ダンス必修化に伴い中学校の体育授業の現場が困惑していること、特にダンスに対して知識がない男性教員や男子生徒に向けた授業への不安を抱えている現状があるとわかった。さらに、教員へのアンケート調査により、教材の内容の問題ではなく教材の形態に問題があることが浮かび上がった。これまでにもテキストや講習会などの教材はあったものの、それらが現場の教師の求めている形ではないことが示されたことから、筆者の経験を活かした教材の作成を行うことにした。保健体育授業における目的を満たした上で、教員の抱える不安を軽減するようないつでも見返せる手軽なテキスト教材および動画教材の開発をした。それらを、実際に中学校で体育を指導している３名の教員に使用し評価してもらった。その結果、スマートフォンを利用したいつでも見られる教材の需要があることがわかった。

キーワード：ダンス必修化、ダンス、教材開発、教員、保健体育

目次

１．研究の目的と概要 6
１）筆者の経験 6
２）ダンス必修化の背景 6
３）ダンスの定義 7
４）論文の構成 8
２．先行研究に見るダンス授業の現状と目的 9
１）ダンス授業の現状と課題の把握 9
（１）方法 9
（２）結果と考察 9
２）ダンス授業の目的と意義 11
３.横浜市の中学校の現場調査 14
１）方法 14
①対象者 14
②調査期間 14
③質問内容 14
２）結果と考察 14
３）結論 15
４.教材の作成 17
１）教材のコンセプトと説明 17
２）具体的な内容について 17
５．教材の評価 20
１）方法 20
２）結果 20
３）考察 21
４）結論 22
６．総括 23
謝辞 24

付属資料 25
参考文献 35

図表

【図 1　ダンス必修化による変化（筆者作成）】 7
【図 2　QR コード例】 18

【表 1　文献検索結果】 9
【表 2　横浜市中学校調査結果】 14

１．研究の目的と概要

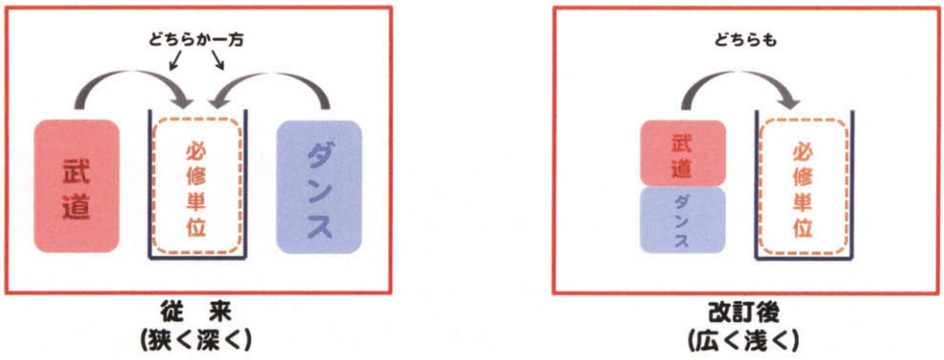
１）筆者の経験

私は２００３年から現在までストリートダンスをしてきた。ストリートダンスを通して、仲間と一緒に協力して何かを作り上げることや身体的表現でものや感情を伝えることの素晴らしさを感じてきた。そのため、他のスポーツでは経験できないことがあると信じ現在まで継続してダンスに取り組むことができた。ダンスを通して、自身は身体的にも精神的にも成長してきたと感じている。そのような経験をより多くの人にしてほしいと思うと同時に、ダンスに対して感謝を伝えたいと感じこのたび研究テーマに「ダンス」を選択した。この研究が、ダンス授業の楽しさと質の向上や教員のスキルアップに繋がることを願っている。

２）ダンス必修化の背景

文部科学省は平成２４年度から、中学校の保健体育の授業において「ダンス」を必修化すると発表した。

平成２０年３月に改訂した中学校指導要領において、保健体育では生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けて、小学校から高等学校までの１２年間を見通して、各種の運動の基礎を培う時期、多くの領域の学習を経験する時期、卒業後に少なくとも一つの運動やスポーツを継続することができるようにする時期といった発達の段階のまとまりをふまえた系統性のある改善を図った。このことを受け、中学校において、第１学年で従前「武道」または「ダンス」のいずれかを選択とし、それ以外の領域を必修としていたことを改め、小学校高学年との接続をふまえ、多くの領域の学習を十分させた上で、その学習体験をもとに自ら探求したい運動を選択できるようにするため、第１学年及び第２学年で、すべての領域を履修させるとともに、選択の開始時期を第３学年とした（文部科学省)。



【図 1　ダンス必修化による変化（筆者作成）】

ダンス必修化の背景として、学生にスポーツや運動を長期的に行ってほしいという願いが読み取れる。そのためにも保健体育において競技を学生に「楽しんで」もらい、運動を長期的に行ってもらうための条件整備をする必要がある。しかし、「ダンス」分野においては新たな取り組みであるため現在では体勢が整っていないと考えられる。今までの保健体育授業において、男子が「武道」を女子が「ダンス」を選択する場合が一般的であった。このような改訂によって、新たな受講者である男子の授業や新たに指導することになった男性教員に変化が伴い混乱があるのではないかと予想される。

本研究では、以上の背景から平成２４年度から実施される保健体育におけるダンス必須化について取り上げ、現在課題として考えられる「現場の教員の経験・知識の不足から生じる授業への不安感」を軽減させるための対策を考えたい。筆者の経験を基に、教育委員会や文部科学省のような機関ではなく、一大学生からの視点で対策を伝えていくことを目的としている。それによって、手軽でかつ経験者の立場からより効果的に課題に向き合うことができると考えるからだ。

３）ダンスの定義

ここでは、本論文で扱う「ダンス」という用語の定義をする。

ダンスは古代より人々の生活を共にし、世界各国で様々に進化してきた。治療や呪術、共同体の結びつきを強める、社交や娯楽といったものから、美の追求、自己表現まで時代とともに多様化してきた（北海道教育委員会）。そのため、それぞれのダンスによって特有の動きや守られた固有の動きがあるのは言語や文化の発展と同じようなものである。ストリートダンスにもそれぞれの特徴があり、現在では「ロックダンス」「ブレイクダンス」「ポップダンス」を中心に「オールドスクールダンス」と呼ばれるものと、

「ヒップホップダンス」「ハウスダンス」などの「ニュースクールダンス」と呼ばれるものがある。その名の通り、「ニュースクールダンス」は 1990 年前後以降のダンスのことを言い現在でも進化しているジャンルである。

ダンスには他の身体運動と異なり、以下の特徴がある。

① 心と体が一体となった表現運動である。

② 律動的（リズミカル）な運動であり、他者とのコミュニケーションを通した共感的交流が成立しやすい運動である。

③ 心身を開放することができる運動である。

④ 時間、空間などにより踊りを多様に変化させることが可能な運動である。

⑤ 幼い子どもが自由に踊るような自然な動きから、長期に渡る研さんを要する技能まで幅が広く、生涯にわたって追求したり親しんだりすることができる運動である。

以上をふまえた上で、ダンスは、『イメージをとらえた踊りによる交流を通して仲間とのコミュニケーションを豊かにすることを重視する運動で、仲間とともに感じを込めて踊ったり、イメージをとらえて自己表現したりすることに楽しさや喜びを味わうことのできる運動』である。

4）論文の構成

本論文は六章構成である。第一章では、研究目的に対して筆者の背景とダンス必修化への社会的背景の双方から説明する。本研究で扱う「ダンス」の定義をする。第二章では、ダンス授業の本来の目的と、現状の調査を先行研究からまとめた。第三章では、実際の教員からの声をまとめ現場の課題を明らかにした。それらを考慮した上でテキストを作成し、第四章ではテキスト作成の説明をした。第五章では、現役の教員のインタビューを基にテキストの評価を行った。第六章では、総括としてこの研究から得られた示唆を基に、今後の展望を述べる。

《引用文献》

文部科学省. 文部科学省 HP.
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1306098.htm

北海道教育委員会. 平成２２年度中学校武道・ダンス必修化に向けた地域連携指導実践校事業報告書.
http://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/ktk/grp/05/dansutangenkeikakurei1.pdf

2．先行研究に見るダンス授業の現状と目的

本章では、保健体育授業におけるダンス授業の現およびその目的について先行文献を調査して、明確にする

1）ダンス授業の現状と課題の把握

本編は、中学校の保健体育で行われているダンス授業の現状や課題について、先行する調査研究から把握することを目的としている。ダンス授業について理解することで、現代的なリズムのダンスの授業の方法、また大学生が介入する方法を考える上での情報になると考える。

（1）方法

今回はCiNiiを使い、文献を検索した。検索キーワードは以下のとおりである。

【表 1　文献検索結果】

検索ワード	文献数
ダンス必修化	5件
現代的なリズムのダンス＋授業	11件
ダンス＋授業	701件
ダンス授業	271件
ダンス授業＋現状	1件

検索ワードを入力し、検索にかかった文献の題名および概要を黙視し、レビューの対象とした文献を選別した。選択の条件としたことは、2002年以降に書かれた論文であるかどうか、教員を対象にした研究かどうかの2点である。本稿では現状把握を目的としており過去10年より古い論文は選択しなかった。また、本研究では教員に起こる効果について注目している。よって、先行研究でも教員への調査をしたものを対象とした。

また今回は、論文だけでなく文部科学省のホームページや学習指導要領からも情報を取り入れている。

（2）結果と考察

-ダンス授業と教員の現状

中村[1]の調査によると、東京都の中学校のダンス担当の教員の数は平成20年のダンス必修化の告示から男女ともに増加している。しかし、女性教員のダンス経験年数が15.6年であるのに対し、男性教員のダンス経験年数は2.7年と有意な差が認められた。また、女性教員の47人中2人がダンス指導経験が全くないのに対し、男性教員は112名中15名(40.2%)と高い割合を示している。選択授業によって、男子は武道、女子はダンスといったように、必修化する前から女子に対するダンス授業の指導は経験があった

のに対して、男子に指導する経験がなかったことが伺える。この調査によって、ダンス必修化で経験不足や知識不足に不安を抱えているのは、女性より男性教員が多いということが示された。

教員のダンス授業に対する評価としては、肯定評価が 36.8%、否定評価が 35.9%とあまり変わらない。否定評価の理由として、①ダンスを指導できる教員が少ない(51.7%)②男子へのダンス指導は難しい、不安である(42.9%)と、やはり男子に対する不安と経験不足を訴えている[2]。このままでは、指導経験の少ない教員が担当する割合が増加し、学習の質が低下する可能性が考えられる。

保健体育科の全域必修化に伴う反応として、ダンスが男子に適していないなどという意見もあり、抵抗を感じている教員も少なくないようだ。その中でも、年齢の高い教員ほど男子の履修を重視していない傾向がある。

-現代的なリズムのダンスの授業について

ダンス授業では「創作ダンス」「フォークダンス」「現代的なリズムのダンス」が選択可能であるが、中村の調査によると男女のクラスによってこれに差がある。女子クラスは創作ダンスの採択率が最も高く、共習クラスはフォークダンス、男子クラスは現代的なリズムのダンスが最も選択されている。クラス編成により、授業内容に知が良いがあることがわかった。現代的なリズムのダンスの授業の内容としてはビデオ等の既成作品の模倣が 26%と、全体の４分の１が定型の動きの習得学習や模倣学習をするという結果が見られた。男子学生への授業に対して、現代的なリズムのダンスが最も多く選択されている一方で、新学習指導要領に乗っ取った授業がされていないように考えられる。

現代的リズムのダンスの採択理由としては、①踊る楽しさの体験(81.3%)②生徒の興味が高い(50.7%)などが上位である[3]。どちらも教員の経験や知識から採択しているわけではなく、生徒のために授業をしているという意図が感じられる。また、ダンス授業が運動技能や学習態度の育成よりも生徒の楽しさ体験や興味・関心を優先的に考えているとわかる。

-指導法研究・教材研究の有無

ダンスに対する経験の不足を感じている教員であるが、ダンス必修化に向けて研修や教材研究をどのくらいしているだろうか。「している」と回答した教員は 25.6%なのに対して「していない」と回答した教員は 74.4%と、していない教員が有意に多い。「していない」理由としては、①忙しくて時間がとれない(67.3%)②適当な教材が見当たらない(20.7%)と、上位２つの理由でほとんどを占めている[4]。忙しいのを理由のする教員

がほとんどで、次に教材の選び方がわかっていないことから、手軽で明確に教えることのできる機会が与えられることを考慮しなければならないだろう。

（3）結論

以上の文献調査より、ダンス授業の現状および課題として、以下の3点が明らかになった。

① ダンス必修化が告示されてから教員の人数は増加の傾向にある。しかし、男性教員は経験・人数ともに不足しており授業に影響を与えると考えられる。またダンス授業に対して、教師が抵抗を感じるのは男子生徒への授業であり、教員・生徒ともに男性のダンスへの接触というのが課題となっている。

② ダンス授業の中で、3つの種類のなかでも「現代的なリズムのダンス」が最も採択されている。その理由としては、楽しさや興味からであり生徒が抵抗を感じることなく授業に取り組めるように考えている。一方で、教員の経験が追いつかず、ビデオの模倣などで授業が進むことも多く教員の教材が不足している。

③ 教員は教材や、指導を求めているものの時間を理由にやっていない人がほとんどであった。今後、指導の確保をするにあたって時間を考えた手軽な方法を提案することが求められる。

2）ダンス授業の目的と意義

保健体育のダンス授業において、求められる点や重視されている点について引用文献を基に論じる。

「ダンス授業の目的と意義」

- 様々な動きを体験し、身体イメージや身体感覚を高めることができる。
- 仲間と一緒に踊ることや、自分と異なる表現を認め合うといった人とのかかわりを通し、自己表現や他者を理解する経験が自信につながり、コミュニケーション能力を向上させることが期待される。
- 律動的な運動による快感や身体的な接触は笑顔を引き出し、心と体の緊張を緩和してストレスを軽減させることができる。
- それぞれの興味・関心や能力に合わせて取り組むことができる運動であり、活動的な生活を維持するものとして生涯にわたって楽しむことができる。

（北海道教育委員会）

（1）考察

歩く、走るなどのような日常使うからだの動きではなくできるだけ普段使わないような動きやリズムを教えることが求められる。ダンスのやり方にも様々あり、1人で踊ったり2人や複数人で競い合ったりするダンスもあるが、ここでは仲間との交流を重視している。したがって、授業の中でも、チームを組んで表現することや誰かと一緒にダンスをすることが求められている。また、認め合うことが大切なのでダンスは正解のない運動だということを強調することも大切だと考える。律動的な動きという点については、ダンスの中でも一定のリズムとステップを刻み続けるダンスが体育授業において有効なのではないかと考える。具体的には、ハウスダンスのように一定のリズム（4つ打ちと呼ばれるリズム）が続くような音楽を使用したダンスが良いと考える。ハウスダンスは現代的リズムのダンスの内の1つであり、1で述べたような現状の課題を解決するにも適している。また、身体的接触ができるようにペアやグループを組んだ学習にする方がいいだろう。ダンスには正解・不正解がないものである。運動に対して苦手意識を持っている人でも、相手と競い合うものではないので不安に思うことなく取り組める分野である。そのことを理解させる授業展開をすべきだと考える。

（2）結論

以上より、保健体育におけるダンス授業に必要な点を3点まとめた。

① 1人行うのではなく、仲間とチームを組んで一緒に踊り交流すること
② 律動的なリズムを刻む音楽を使ったダンスにすること
③ 相手と競い合うのではなく、互いに認め合うような授業展開であること

《参考文献一覧》

1. 中村 恭子.　中学校体育全領域必修化に伴うダンス授業の変容と展望--東京都公立中学校を対象とした調査から.　2010, vol. 1, no. 4, p. 472-485.

2. 中村 恭子.　11-10-10107-6 中学校のダンス男女必修化に対する現場教員の評価と今後の課題(体育科教育学 2,11.体育科教育学,一般研究発表抄録).　2008, no. 59, p. 236.

3. 中村 恭子.　中学校ダンスの男女必修化の課題--中学校教員を対象とした調査にもとづいて.　2009, vol. 1, no. 1, p. 27-39.

4. 中村 恭子.　11-26-K311-6 中学校ダンス男女必修化に伴うダンス授業実施状況の推移と問題点(11.体育科教育学,一般研究発表抄録,ひろしま発 ひとを育む体育・スポーツ).　2009, no. 60, p. 259.

《引用文献一覧》

北海道教育委員会. 平成２２年度中学校武道・ダンス必修化に向けた地域連携指導実践校事業報告書.
http://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/ktk/grp/05/dansutangenkeikakurei1.pdf

３.横浜市の中学校の現場調査

本章では、現役の教員から現在の教育現場の調査を行った結果をまとめる。この調査により、現場の課題を把握することを目的としている。

１）方法

①対象者

横浜市で勤務し、現在も保健体育を教えている教員を対象としアンケート調査を行った。調査対象者は、筆者の母校の教員へメールにて転送を依頼した。泉区１人、戸塚区２人、栄区１人からアンケートを回収することができた。４人はそれぞれ別の学校へ勤務していて、１０年以上教師として働いている。

②調査期間

調査は２０１２年１０月上旬にメールを送信し、１０月中旬までに返信があったものを対象としている。

③質問内容

Q1：勤務地区はどこか

Q2：学校が選択しているダンスのジャンルは何か（創作ダンス、現代的リズムのダンス、フォークダンスの内どれか）

Q3：担当教員は誰か（男女区別はあるか）

Q4：授業形態はどうか（男女別か男女共習か）

Q5：ダンスの講習会への参加の有無

Q6：ある場合は、感想　ない場合は、講習会についての意見

２）結果と考察

調査結果を以下にまとめた。

【表 2　横浜市中学校調査結果】

所在地	ダンスのジャンル	担当教員	授業形態	講習会への参加
泉区	現代的リズムのダンス	男子は男性教員、女子は女性教員	男女別々	あり：あまり参考にならなかった
戸塚区	現代的リズムのダンス	女性教員	男女共習	あり：授業に直結する内容ではなかった

戸塚区	創作ダンス	体育教員（男女関係なく）	男女共習	なし：必修化する前と変更がないため
栄区	フォークダンス	男子は男性教員、女子は女性教員	男女別々	なし：必要性があれば行く

選択するダンスの種類は、現代的リズムのダンスが２校、創作ダンスが１校、フォークダンスが１校だった。

先行文献同様、横浜市でも現代的リズムのダンスを選択する学校が多かった。担当教員は、中には女性教員のみという学校もあったが男女ともに教えなければならないという現状があることがわかった。

授業形態も、学校により様々でダンス授業に関わらず保健体育の授業全般で男女別々のところは男女別々に、男女共習のところはダンス授業も共習であるようだ。横浜市の中学校では、保健体育で男女共習の学校が近年増加傾向にあり、その影響を受けているようだ。

講習会については、現代的リズムのダンスを選択する学校では参加しているが、そうでない学校では不参加という結果になった。創作ダンスやフォークダンスは、必修化する前と授業内容にほとんど変化がなく、学校外で行われる講習会に参加しなくても学校内の教員だけで授業を展開できるからのようだ。今回は講習会に参加してない学校でも、必要性があれば行く、という意見にも見られるように、講習会など学校外でも積極的に学ぼうという姿勢が見られた。必修化を受けて、新たな分野を取り入れることやそれに対して学校外の時間も費やすことに抵抗があまり見られなかった。講習会に参加した教員の意見では、「あまり覚えていない」と言った曖昧な感想が返ってきた。この講習会は、教育委員会が実施したもののことを指している。講習会が役に立たなかったという意見では、内容の良し悪し以前に内容を忘れてしまうという意見が見られた。内容が授業に合うか合わないかという改善よりも、「講習会」という形態の改善や他の教材を与える機会を増やすことが求められているようだ。

３）結論

以上より、横浜市の中学校の現状を３点にまとめた。

①ダンス必修化によって、男性教員が男子生徒にダンスを教えるという現状がある。

②講習会など、学校外への教材に対して積極的に取り入れようという姿勢が見られた。

③講習会などは内容を忘れてしまうという形態を改善する必要性がある。

つまり、講師の選択や音楽など内容の改善が求められているのではなく、忘れにくい印象を与えることや忘れない形に残るものが教材としてふさわしいのではないかと考えられる。

４.教材の作成

先行文献と現場の調査をふまえた上で、教員のための教材作りを行った。本章ではその説明と工夫した点を具体的に説明する。

１）教材のコンセプトと説明

第２章では、ダンス必修化後多くの学校で現代的リズムのダンスが選択されているにも関わらず知識不足が課題とされていることがわかった。また、短い時間で手軽に学べる教材の必要性があるとわかった。第３章では、現場の教員は講習会など学校外での学びに積極的だとわかった。その一方で、講習会では内容を忘れてしまうという短所が指摘された。以上の理由から、①現代的リズムのダンスの②いつでもどこでも短い時間で③復習できる教材を、④テキストという形で作成することとし、「先生のためのハウスダンスの教科書」と名付けた。

このテキストでは、「先生のための」というのが最大のコンセプトである。そのため、最終的に教員が生徒に教えるという目的を持って学べるような工夫をした。第２章でまとめたダンス授業に求められていることを網羅し、内容に組み込むことで授業にそのまま活かせるようにした。まず第一に、律動的なダンスのジャンルであるハウスダンスを選択した。次に、１人で学ぶだけでなく２人以上のグループで一緒に踊れるようなステップを載せ、最終的に踊るという流れで内容の構成をした。最後に、保健体育授業の最終目的である「長期的に運動を持続させる」ために生徒が「楽しく」運動できることを意識してテキストと作った。

２）具体的な内容について

①教える側が読む教材として工夫した点

現状で問題になっているように、教員がダンスの基礎や知識が足りずに不安を抱えているという。このテキストでは、ダンスの動きや基礎はもちろん歴史や起源を冒頭に加えた。ダンスの背景を理解することで、初心者であってもダンスを学ぶことに対して取り組みやすくなると考える。また、基本情報を得ることでその後の学習を忘れなくなると考える。

テキストの中では、ポイントとして学ぶという視点のみならず教える視点での記載をしている。どのように声をかければ良いとか、どのように理解させるかというポイントを明記することで教える側に役立つ工夫をしている。（また、授業構成の見本をつけることで授業展開の参考になるようなコンテンツを設けた。それを参考に、教員が授業に対する不安感をなくすことを期待する。）

②長期的な運動のために、重視した点

「楽しい」と感じられる内容にすること。具体的には、ストリートダンスの中でハウスダンスを選択したことである。ハウスダンスで使用する音楽は、テンポが BPM120 である。これまでの研究で、音楽が心拍数に影響を与えることが報告されている。また、適度な興奮が BPM120 ほどの心拍数だという研究[1]から、ハウスダンスの音楽は適度な興奮＝楽しさを引き出す力があると考えられる。よって音楽に馴染みがない教員や生徒も、聞いていてリズムに乗る事で楽しむことができると考える。以上の理由より、ハウスダンスは

また、体育授業では受容感（教師や仲間から認められる感じること）と統制感（努力すればできるということ）を与える工夫をすると、運動有能感が得られるとわかっている[2]。この運動有能感が生涯スポーツをやることに影響を与えている。そのため、難しい動きではなく基礎的な動きを中心にし、統制感が得られるようにした。さらに、応用のステップを加えて達成感を味わえるようにすることで「楽しさ」を感じられるようにしている[3]。更に、仲間とチームを組んで考え、良い点を見つけるように授業展開をする提案をしている。

③手軽に見返すために工夫した点

このテキストは、「いつでも・どこでも見られる」手軽さを重視して作成した。テキストでは、ステップの説明などをできるだけ詳しく、１つ１つの動きを細かく記載したが、小さく印刷した場合やスマートフォンなどの端末でも見られるように大きな図を用いている。また、テキストの図や文字だけでなく、全ての説明で動画を撮影して実際の動きと音で見られるようにした。その動画を youtube にアップロードした。QR コードにしてテキストに記載し、動画を見たいときにすぐに URL が出てくる工夫をしてある。動画では、短い時間でも復習できるように、１つ１つの長さを平均して１分程度と短くした。

【図 2　QR コード例】

《参考文献一覧》

1. 松村 悦博. スキー競技における競技歴からみた心拍数の分析. 日本大学芸術学部紀要. 2001, vol. 35, p. 131-136.

2. 新冨 康平, 中田 富士男, 小原 達朗, 木下 信義, 呉屋 博. 運動有能感を高める体育の授業の工夫：長距離走の授業実践. 2010, vol. 9, p. 197-206.

3. 内山 須美子. 「現代的なリズムのダンス」の学習意欲と学習成果に関する研究：内発的動機づけとしてのフロー感覚との相関. 白鴎大学論集. 2011, vol. 26, no. 1, p. 173-209.

５．教材の評価

本章では、教材を実際に教員に見てもらい行ったインタビューを元に教材の評価を行う。

１）方法

横浜市栄区山手学院中高等学校に勤務する、現役の体育教員３名にインタビューを実施した。

- A さん（以下 A）…４０代女性教員、ダンス授業の経験あり、スマートフォンの使用経験なし
- B さん（以下 B）…５０代男性教員、ダンス授業の経験なし、スマートフォンの使用経験なし
- C さん（以下 C）…２０代男性教員、ダンス授業の経験なし、スマートフォンの使用経験あり

事前に教材を印刷したものとスマートフォンに表示させたものの２つを渡し、実際に手にしてもらった感想を聞いた。それぞれ１０分程度でフィードバックという形で、自由に話してもらった。その発言をハード面（機能性や、コンセプト等について）とソフト面（内容について）の２つに分けてまとめた。

２）結果

①ハード面について

- QR コードで動画を読み込めるという発想がいい。(A)
- 私たち世代だと、スマートフォンを使用している人が少ないので発想は新しくていいけど、実際にみんなが使うには時間がかかるかも。(A)
- 最近ではスマートフォンではなくても、見られるものが多くなってきたので携帯で見られるのは本よりも手にとりやすいかも。(A)
- スマートフォンでこんなことができるなんて知らなかった。自分にはついていけない。本にして売ったら売れそうだね。(B)
- ダンス授業のことはよく知らないので内容の良し悪しや、授業に直接使えるかどうかはわからないけど、自分が教えることになったら使用したい。(C)

②ソフト面について

- 文字が多いと読む気がしないので、図とちょこっとした文というバランスがいい。(A)
- とにかく簡単なことを盛り込んで、小さい子に教える感覚で書くといいね。(A)

・ 足を置く順番を色で変えて表記したほうがわかりやすいかも。左右違う色にした方がわかりやすい。(A)
・ どんな音楽を使って練習すれば良いのか、音楽についてもっと記載があるといい。心肺蘇生法はあんぱんまんマーチのテンポが合うと言われているけど、それみたいなどれくらいのテンポでやると丁度いいのかっていう例があるとわかりやすい。(A)
・ 0からのスタートと考えると、初歩的なステップを教えることから始める流れがいい。(A)
・ 文字が少なくて、見やすい。内容もわかりやすい。自分でもできそう。(B)
・ このまま動画をテレビにつないで授業できそう。(C)
・ 学校で教員が見る教科書なんて、写真が載っているだけで授業のやりようがないからこんなに詳しい教材があったら役に立つ。(C)

3）考察

①ハード面について

「手軽さ」をコンセプトとしスマートフォンを利用した点について賛否が得られた。女性教員からは、教材が携帯で見られるという点について「本よりも手に取りやすい」という好意的な意見をもらえた。スマートフォンを普段から使用している２０代男性教員からは、使ってみたいという意見と共に、どのように配信するのかという質問を求められた。新たなテキストの形態として、PDF 化した教材の可能性を感じたが、今後は配信方法などどのように使ってもらうかという点について考えなければならない。

その一方で、５０代男性教員は、普段携帯電話を使用する頻度も低く、スマートフォンに対して抵抗感があるようだった。製本した方が良いという意見をもらい、手軽さよりも馴染みがあるかということの方が重視されていた。ターゲットを明確に絞り込み、その上で「手軽」の定義をもう１度決める必要があると考えた。

②ソフト面について

色の付け方や音楽の記載の有無についてなど細かい指摘を受けたが、全体的な流れや印象については好評価であった。ターゲットである５０代男性教員も本を片手に体を動かし、ステップを理解している様子だった。

今回のインタビューでは、ダンス必修化以降現代的リズムのダンス授業の担当をしていない人のみしか出来なかった。そのため、内容が実際の授業に活かせるかといったようなフィードバックをもらうことができなかった。内容については、指摘された点を修正した上で、ダンスを専門に扱う教員に見てもらう必要性を感じた。

体育教師が授業する際に見る教科書では、ダンスの単元は１５ページほどしかなく、文字のほとんどない写真が並べられたものだった。確かにそれだけではわかりづらく、

今回のように１つの単元で詳しく記載した教材の必要性を改めて感じた。

４）結論

実際に体育の授業を担当する教員３名に、筆者が作成した教材を手にしてもらいフィーダバックをもらった結果、明らかになった３点を以下にまとめた。

①体育授業において１つの単元を詳しく説明した教材が不足しており、教員から今回のような１つの単元に特化した教材の需要がある。

②新たな教材の形態として、スマートフォンを利用して教材を配信する場合、その配信方法や広め方を考えなければならない。

③今後教材をどのような形態にするかは、ターゲットを絞り求めているものを調査し設定する必要がある。

６．総括

第６章では、本研究の総括として、ダンス必修化において不安を抱える教員の支援の方法として、オリジナル教材を使用することへの可能性と展望を論じる。

まず第一に、ダンス必修化で教師が感じている不安の原因は知識不足である。しかし、保健体育の教育現場ではある単元に特化した教材というのは少ない。平成２４年に必修化されたダンスに関してもそうである。特に、必修化後に選択ができるようになった現代的リズムのダンスの教材が不足している現状がある。今回私は、その現状を解消するために現代的リズムのダンスに特化した教材の作成をした。現場の調査により、ある特定の単元に特化した教材への需要があることがわかり、教材の評価は高かった。しかし、今後どのようにこの教材を広めていくか、どのようにしたら多くの人の手に届くかといった思索が必要だとわかった。市販されている教材への認知も低く、認知を広げることができればダンスに対して不安に思っている現場が変わるのではないかと考えた。

次に、ダンス必修化で不安を抱えている教員は今までダンスを教えて来なかった男性教員が中心である。またダンス必修化以降現代的リズムのダンスを選択する学校が６割を越えていて、従来のダンス教員も知識不足で不安を抱えている現状がある。それにも関わらず、時間がないのを理由に学校外で教材を手にすることがあまりなかった。そこで、男性教員でも手に取りやすく短い時間でも学べる教材の必要性がある。そこで独自に開発した教材をPDF化し、スマートフォンでも閲覧可能にした。「手軽な＝いつでも見られる媒体を通した」と設定したが、世代によってはその媒体が異なることがわかった。スマートフォンは４０代５０代の教員の中では持っている人自体少なく、もはや携帯電話も身近な存在ではないようだ。したがって、それぞれのターゲットに合わせた媒体の設定の必要性を感じた。今回のような教材の形態では、スマートフォンに馴染みのある年代でこれから保健体育でダンスを担当する教員には役立つ可能性を感じた。

今回の研究では、母校以外の学校への接触の難しさを感じた。一学生が教育現場のリアルな声を聴くことは難しく、多くの情報を得ることができなかった。その中で仮定を普遍化するのは難しく、それらは今後の課題である。学校に直接行くのではなく、教育委員会から情報を得るなど、他の方法も視野に入れて考える必要があるだろう。しかし、少ない情報の中にも気付くことやその人たちのためになることを探し行動することができた。この研究が１人でも多くの人に役立つように、今後も伝え発信していきたい。

謝辞

本研究を進めるにあたり、ご指導してくださいました秋山美紀先生、武林亨先生、内山映子先生、北野華子さんお世話になり本当にありがとうございました。研究生活の様々な場面でアドバイスをくれ、支えてくれた秋山美紀研究会の学生の皆さんにも心から感謝申し上げます。また、教材作りで撮影を協力してくれた深堀裕樹くん、教材開発にアドバイスやフィードバックをくださり協力してくださった山手学院中高等学校の体育科の先生方にもお礼申し上げます。

付属資料

資料１　ダンステキスト　「先生のためのハウスダンスの教科書」

先生のための
ハウスダンスの教科書

市川絢子

「現代的なリズムのダンス」を
教えるための“楽しさ”に
こだわった教師のための教科書。

慶應義塾大学秋山美紀研究会

目次

1．ダンスを知ろう
①ストリートダンスが生まれた背景
②ハウスダンスについて

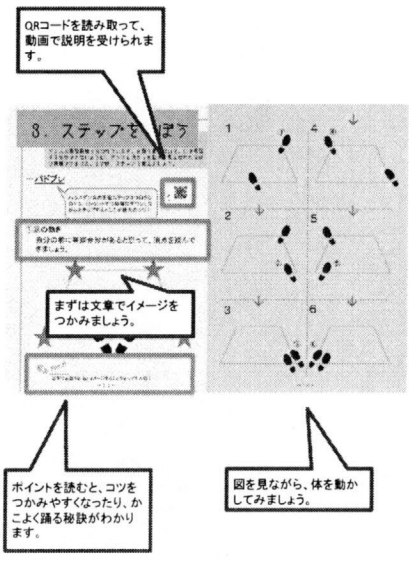
2．リズムを知ろう
ーリズムの基本
▼ダウン
▲アップ

3．ステップを学ぼう
ーバドブレ
ー2ステップ
ー2度踏み
ーウィング
基本編
応用編①②

さいごに：
授業での展開

4．ダンスを作ってみよう
①4×8のダンス
②2人でやってみよう
③みんなでやってみよう

～本書の使い方～



1．ダンスを知ろう

1．ダンスを知ろう

ダンスを教える前に，歴史や特徴を学んで理解を深めましょう．
"意味"を知る事で，子ども達にも教えやすくなるかもしれません．

①ストリートダンスが生まれた背景

〈ダンスは今も発展途上〉

身体的表現は有史以前の原始時代から存在したといわれ、ダンスの歴史は人類の歴史ともいえるほど古いものです。世界各地で独自に育まれ、守られた民族固有のものもあれば、文化の発展とともに徐々に体系が整えられ、娯楽として、また舞台芸術として進化したものもあり、いろいろなタイプのダンスが世界中で踊られてきました。いまやダンスは様々なジャンルがあり、それぞれ進化し続けています。

〈ストリートダンス起源：ヒップホップ〉

ヒップホップは1970年代～1980年代頃にかけてアメリカ・ニューヨークで生まれました。ブレイクダンス、ロック、ハウスなどはこのヒップホップの文化から派生したダンスです。ヒップホップはアメリカのギャング文化とも関係があるといわれ、抗争で血を流さない為に銃や暴力の代わりにダンスで優劣を競い、争ったといわれています。

②ハウスダンスについて

今回このテキストで扱う、ハウスダンスについて紹介します。

ーハウスダンスの起源

〈ピースなダンス〉

ハウスダンスは1977年アメリカシカゴの「WERE HOUSE」というクラブで生まれた音楽に合わせたダンスであることから、WERE HOUSEからとってHOUSE（ハウス）と呼ばれるようになりました。そのクラブにはヒップホップのように"争う"ことを好まない人が集まりダンスを始めたと言われていて、ハウスダンスはとてもピースなジャンルのダンスとされています。

ーハウスミュージックの特徴

〈4つ打ち〉

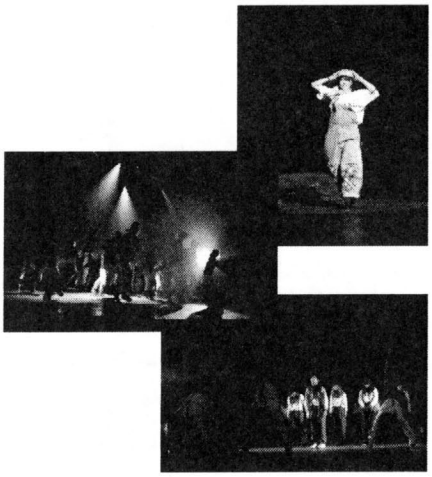
4つ打ちと呼ばれる、強いビートが入っていることが最大の特徴です。このビートによって、一定のリズムが刻まれています。

〈速めのテンポ〉

速めのテンポであるBPM120前後というのは、人が興奮する時の心拍数と同じほどの速さで、音楽を聞くだけでわくわくした気持ちになると言われています。

〈短い繰り返しのメロディのループ〉

同じメロディやリズムを繰り返すことも多く、ステップが合いやすい音楽と言えるでしょう。



ーハウスダンスの特徴

〈ダウンのリズム〉

4つ打ちのリズムに合わせて、常にダウンの動きをし続けます。どんなステップや動きでもダウンをしてリズムを表現していくことが特徴とされています。

〈速れそうな素早いステップ〉

速めのテンポに合わせた「素早い足さばき」が最大の特徴です。この足さばきをステップと呼びます。様々なステップは今でも数を増やし、変化し続けている。このステップによって、リズミカルな音楽に合わせたダンスが表現できるのです。

2．リズムを学ぼう

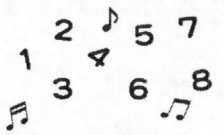
2．リズムを学ぼう

リズムは、心臓の鼓動を体で表現したのが始まりといわれています。8カウントを体感し、体で表現できるようになることがダンスの基本です。

ーリズムの基本

STEP1 **数えながら手拍子でリズムをとる**

①8つのテンポ（カウント）の音を聞く



Point!

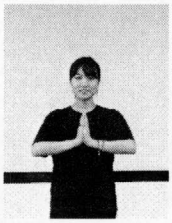
リズムは、基本は8カウントを一つのかたまりとして数え、その繰り返しでできています。8の次は、また1から始まります。

②手拍子で8カウントをとる

Point!

ゆっくりのリズムから始めて、だんだん速くすると子供たちが無理なくついてこれます。

③手拍子で“オン”と
“エン”カウントを理解する



《オン》

《エン》

解説

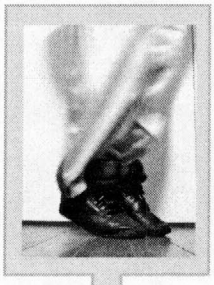
8カウントのうち1 and 2 and 3 and …の1や2の表拍子を「オンカウント」と言います。手拍子で言うと、手が閉じている状態です。and（エン）がエンカウント（裏拍子）で、手が開いているときです。

STEP2 **腰でダウンとアップをとる**

ダウンとアップはリズムダンスのすべての動きの基本となります。動きにダンスとしての厚みや重みを持たせることができます

▼ダウン

①まずはジャンプでダウンの
リズムをとろう

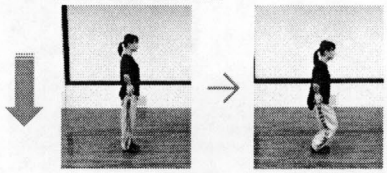


そのままつま先をつけて、
ハウスダンスのダウンを感じてみよう！

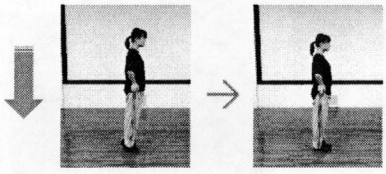
▸詳しくは次のページで解説します

②ハウスダンスのダウンの
基本を学ぼう

1：ベた足で膝だけダウン



2：つま先だけて膝を曲げずにダウン



3：両方合わせて、ハウスのダウン！

Point!

上記では足の動きを説明してますが、ダウンはあくまで腰の動き。
“ダウン＝足を曲げる動き”
ではなく、イスに腰をかけるように“腰を落とす”と覚えるのがコツ。
そうすると、他の動きに連動しやすくなります。

▲アップ

ダウンとアップは、表裏一体の動き。この2つを理解しないとダンスができないと言っても過言ではありません！

①動きはダウンと全く一緒！

まずは、手拍子で違いを感じてみよう。

②音に合わせてアップしてみよう

Point!

カウントの0.5拍前に呼び動作としてヒザを曲げます。

Point!

まずはゆっくり、1、3、5、7カウントでアップする動きをやってみましょう。できるようになったら、倍速に挑戦してみよう。

3．ステップを学ぼう

3．ステップを学ぼう

ダンスは表現運動と言われています。言葉を覚えないと、口で表現するのができないように、ダンスも決まった動きを覚えなければ体で表現できません。まずは、ステップを覚えましょう。

ーパドブレ

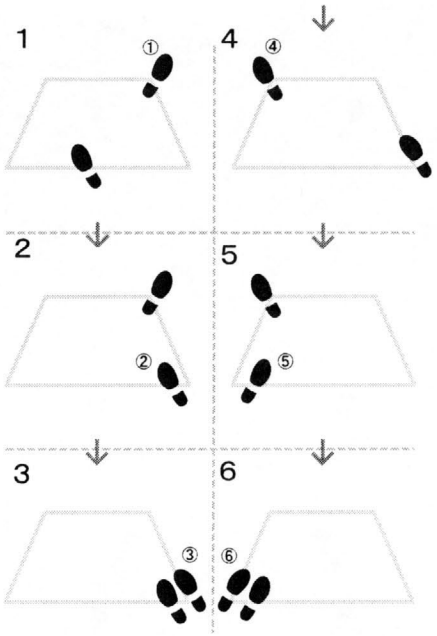
ハウスダンスの王道ステップ3つのうちの1つ。1カウントずつ均等にダウンしながらステップするところが最大のコツ！

①足の動き

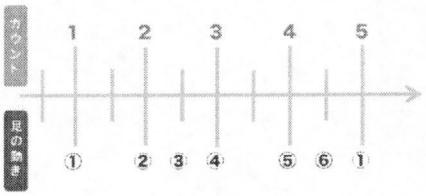
自分の前に等脚台形があると思って、頂点を踏んできましょう。

Point!

足下に台形があるとイメージすることがとても大切！



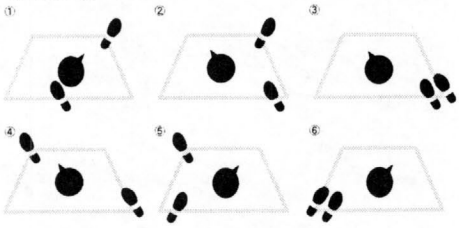
②足のリズム



Point!

不規則なリズムなので、注意！手拍子しながら、『トントトントト』というリズムを頭に入れてもらってから体を動かすと良い。

③体の向き



Point!

踏み出す足のつま先と体の向きが一緒と覚えましょう。

ー2ステップ

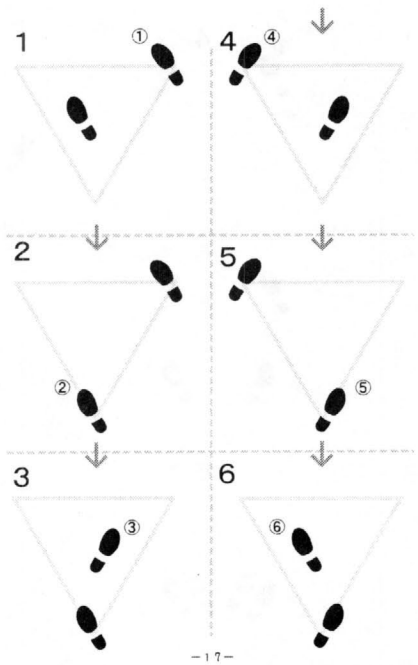
王道ステップその2。別名をルースレッグともいう。体の軸をずらさずに、足を動かしステップをするのがコツ。

①足の動き

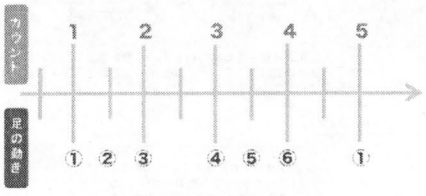
自分が逆正三角形がの真ん中にいると思って、頂点を踏んできましょう。

Point!

足下に逆正三角形があるとイメージすることがとっても大切！



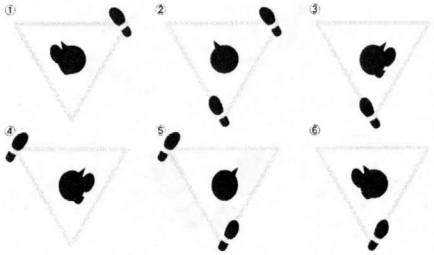
②足のリズム



Point!

不規則なリズムなので、注意！パドプレと同様に手拍子しながら、『トトトントトトン』というリズムを頭に入れてもらってから動くと良い。

③体の向き

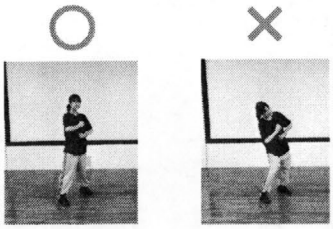


Point!

踏み出す足のつま先と体の向きが一緒と覚えましょう。

ーもっとかっこよくするコツ★

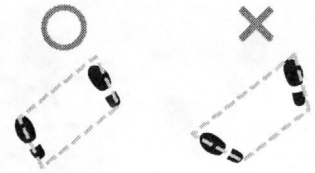
1：体の軸を真ん中から動かさない



Point!

頭の上から串刺しにされたと思って。軸を固定しよう！

2：①②と④⑤のステップは、足が平行四辺形を作るように踏む



Point!

ハウスダンスでがに股・内股はNGです！

3：①と④を踏み出すとき、アーチを描くように足を上げながら

Point!

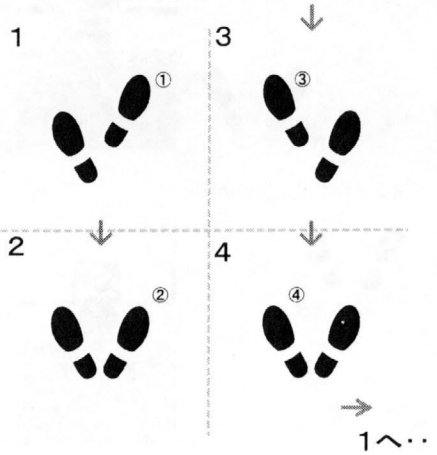
足を上げるときは、青竹踏み程度。

ー2度踏み

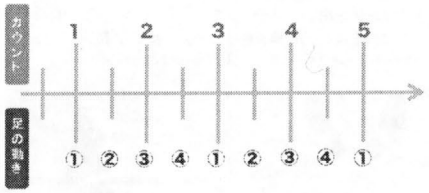
王道ステップ3つ目。基本を覚えると、様々な場面で応用が効くステップ。

①足の動き

右2回（出して戻す）→左2回→右2回‥の繰り返し。



②足のリズム



Point!

一定のリズムだが、感覚をつかむまで少し時間がかかる。まずは、ゆっくりのカウントから、早くしていくと良い。また、すぐに出来なくてもだんだんできてくるステップだと伝える。

ー2度踏みをつかむコツ★

1：スキップと原理が似ている！

Point!

スキップしてみて、だんだん早くするとつかみやす。

2：体重の掛け方がポイント

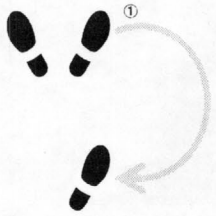
Point!

足に体重が乗りすぎると、うまくできません。イスに腰かけながらやるなど、足に体重をかけないようにできるように教えてあげましょう。

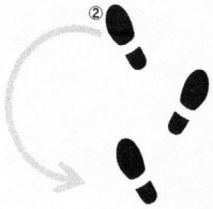
ーウィング（基本編）

①基本の動き（後ろに下がるver.）

1：足で円を描くように床を擦りながら、1歩下がる

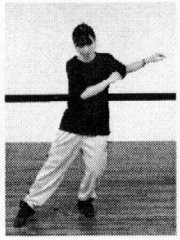


2：1の足が着いたと同時に逆足も同じように下げる。（1、2を繰り返す）

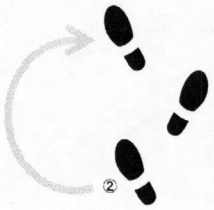


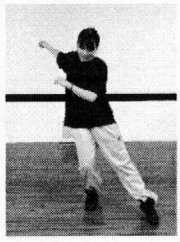
②基本の動き（前に進むver.）

1：足で円を描くように床を擦りながら、1歩前に出る



2：1の足が着いたと同時に逆足も同じように下げる。（1、2を繰り返す）

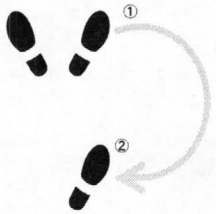




ーウィング（応用編①）

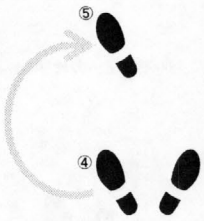
①ウィングを用いたステップ1

1：足で円を描くように床を擦りながら、1歩下がる
※基本ウィングの1（後ろに下がるver.）と一緒です。



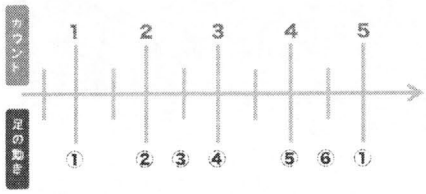
2：逆足も下げた足の横に出す

3：1と反対の足で円を描くように床を擦りながら、1歩前に出る
※基本ウィング（前に進むver.）と一緒です。



2：逆足を前に出した足の横に出す。

②足のリズム



ーこのステップのコツ★

『自分がコンパスになった気分で！』

Point!

滑らせる足でない足を「軸」として、軸がずれないように、円を描くことが成功の秘訣。「コンパス」みたいにと言うとわかりやすい！足に体重が乗りすぎると、うまくできません。イスに腰かけながらやるなど、足に体重をかけないようにできるように教えてあげましょう。

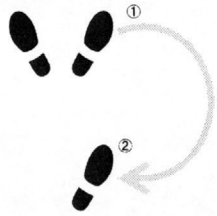
さらに一工夫！

1の足を右足か左足か、スタートの足を変えることによってもアレンジが効きます。練習の段階でどちらもやっておくと体が覚えやすいです。

ーウィング（応用編②）

①ウィングを用いたステップ2

1：足で円を描くように床を擦りながら、1歩下がる。



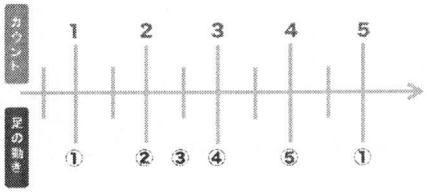
2：逆足も下げた足の横に出す。
※応用ウィングの1～2と一緒です。

3：1で出した足と同じ足を、逆足を追い越すように前を通って横に出す。

4：3と逆の足を、後ろを通って横に出す。

5～8：1～4の手順を全て逆足で行う。
左右同じことをして1セット。

②足のリズム



ーこのステップのコツ★

『一直線上をたどる！』

Point!

足を置く場所を一直線上にして、移動していくのがポイント！

4．ダンスを作ってみよう

4．ダンスを作ってみよう

【ダンスは“ステップ”の組み合わせ！】
今までのステップを使って、ダンスを創ってみましょう。いきなりダンスを創れと言われても戸惑ってしまうかもしれません。しかし、覚えたステップをいくつかつなげれば、もうそれは１つのダンスです。ステップを組み合わせ方で、オリジナリティを出してみましょう。

①4×8のダンス

テキストで習ったステップを組み合わせて4×8カウントの長さのダンスを創ってみましょう。 ステップ1×8分を1枚のカードとして考えて、組み合わせてみましょう。

- パドブレ
- 2ステップ
- 2度踏み
- ウィング

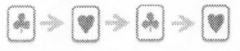
例）

1：

（パドブレ→2ステップ→2度踏み→ウィング）

2：

3：



組み合わせ方は**何でもOK**！
出来上がったら、みんなで発表してみましょう。
ダンスに正解不正解はありません。互いの
「良さ」を発見させることがポイントです！

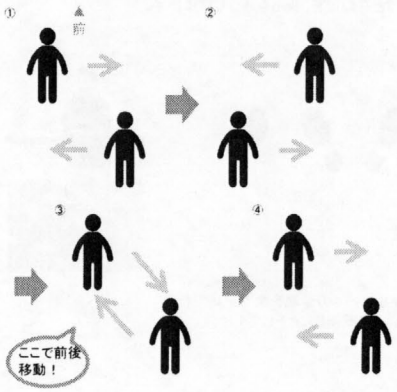
②2人でやってみよう

～左右違った動きをしてみよう～

同じダンスでも、右から始めるのと左から始めるのとではちょっと違って見えます。それを利用して、2人組でペアを組んでダンスを踊ってみましょう。

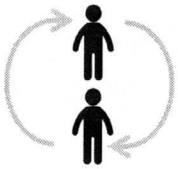
1：**パドブレ編**

まずは前後に距離を空けて、前の人は右から後ろの人は左からスタートします。



2：ウィング編

前後に並んでスタート。ウィングの応用編①のステップを、左右分かれて踊ると、2人で円を描くような動きができます。



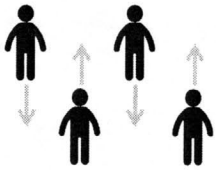
＊動画：
パドブレ編 ▶

ウィング編 ▶

③みんなでやってみよう
～前後違った動きをしてみよう～

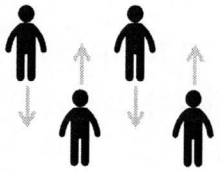
今度は人数を増やして、前後違う動きを加え列を交代してみましょう。

1：ウィング編



前後2列に並び、前の列と後ろの列をウィングしながら交代します。
②でやったような左右違った動きも取り入れて、みんなで踊る楽しみを感じてみましょう！

2：パドブレ編



前後2列に並び、パドブレをしながら前後移動します。体を横向きにしてすれ違うイメージです。

Point!

すれ違うときに、顔を合わせる！そうすると自然に笑顔が出やすいでしょう。

さいごに：授業での展開

実際に、授業での活かし方や授業の流れの例を書いてみました。それぞれの効果をおさらいします。

学習内容	学習効果
イントロ：ダンスの動画鑑賞	大学のサークルの公演など、テーマに沿って踊っている作品の鑑賞によって、イメージを与える。表情や発想など、動き以外の良い点を指摘すると、運動が苦手の生徒が動きやすくなる。
リズムを覚える、ダウンとアップ	ダンスの基礎から習うことによって、ダンスは難しくない、という意識にさせる。
ステップを学ぶ	ダンスをするとでの要素を学ぶことで、体を動かすことへの抵抗感をなくす。
2人組を作って、一緒にダンスを作る	2人でやることによって、恥ずかしさの軽減にも。お互い認め合うことで自信につなげることができる。
グループに分かれて、ダンスの発表	テーマを決めて、表現する。曲の選び方、表情なども評価の対象にする工夫を。ダンスの上手い下手ではなく、気持ちを評価するのがダンスの良い点である。

企画・制作
東京福祉大学総合政策学部秋山美紀研究室
市川絢子
[2007]
神奈川県高等学校総合体育大会ダンス競技　3位
全国ダンス甲子園　6位
[2008]
神奈川県新人大会5位
現在140人が所属する関応大学のダンスサークルW+I&S!に所属。地域の小学生にダンスを教える。
観客動員2000人の舞台でダンス公演の企画・出演などの活動を行っている。

【参考文献一覧】

VOK. グリコHP「PockyStreet」. ? 年 ? 月 ? 日. 2012年11月29日 <http://pocky.jp/enjoy/dance_study/archives/tatsujin08.html>.

川崎深雪. ダンスの教科書　小学校低学年～高学年用. 千代田区：株式会社　山と溪谷社, 2012.

参考文献

中村 恭子.　中学校体育の男女必修化に伴うダンス授業の変容：―平成19年度，20年度，21年度および24年度の年次推移から―.　2009, vol. 2009, no. 26, p. 1-16.

中村 恭子.　中学校体育全領域必修化に伴うダンス授業の変容と展望--東京都公立中学校を対象とした調査から.　2010, vol. 1, no. 4, p. 472-485.

中村 恭子.　11-26-K311-6 中学校ダンス男女必修化に伴うダンス授業実施状況の推移と問題点(11.体育科教育学,一般研究発表抄録,ひろしま発 ひとを育む体育・スポーツ). 2009, no. 60, p. 259.

中村 恭子,　武井 正子,　浦井 孝夫.　117 F10105 「現代的なリズムのダンス」の実施状況と教員の意識に関する研究：教育目標と学習内容の検討.　日本体育学会大会号. 2003, no. 54, p. 616.

伊藤 美智子.　116 F10111 創作ダンス授業における運動有能感に関する研究：受講生はどのようなところに有能さを感じているのか.　2003, no. 54, p. 605.

内山 須美子,　小島 理永.　ダンスの授業におけるフロー体験--ストリートダンスを教材として.　埼玉体育スポーツ科学. 2006, vol. 2, p. 39-54.

内山 須美子.　ストリートダンスを教材としたダンスの授業評価.　論集. 2005, vol. 2, no. 1, p. 69-87.

VOK. グリコ HP「PockyStreet」
http://pocky.jp/enjoy/dance_study/archives/tatsujin08.html

川崎深雪. "ダンスの教科書　小学校低学年～高学年用". 株式会社　山と渓谷社，２０１２.

中学校のダンス授業を支援するための教材開発
～体育教員のスキルアップを目指して～

2013年3月15日　　初版発行

著者　市川絢子

監修　秋山美紀

発行　慶應義塾大学 湘南藤沢学会
〒252-0816　神奈川県藤沢市遠藤5322
TEL:0466-49-3437

Printed in Japan　　印刷·製本　　ワキプリントピア

SFC-SWP 2012-007

■本論文は研究会において優秀と認められ、出版されたものです。